

# 茶の湯のコミュニティー —『天王寺屋津田宗及他会記』に見る交友関係—

山田 哲也  
同志社大学大学院文化情報学研究科  
博士後期課程、今日庵文庫

矢野 環  
同志社大学文化情報学部

三大茶会記において最も重要な『天王寺屋茶会記』の、宗及他会記について、その客組から見た堺茶の湯の様相を考察する。千利休、山上宗二などが、これまで知られていた以上に宗及との交流も深く、また堺における茶人のまとまりが指摘できる。

## Communities in Chanoyu

— Friends and acquaintances in the record “Tennojiya Sogyu Takaiki” —

Tetsuya Yamada  
Graduate School of Culture and Information  
Science, Doshisha Univ., Konnichian Library

Tamaki Yano  
Faculty of Culture and Information Science  
Doshisha University

We investigate the diary of tea ceremonies by Tennoji-ya Sogyu, a great tea master in Nobunaga - Hideyoshi period. There are three famous diaries of tea ceremonies. And the most important one is "Tennoji-ya Chakaiki". Sogyu's diary includes many important tea masters in Sakai. We study their friendship, hierarchy, and determine clusters of them.

### 1. まえがき

報告者は情報処理学会「人文科学とコンピュータ」第78回例会において、「茶の湯のコミュニティー—『天王寺屋宗達他会記』に見る交友の時系列分析—」と題した報告を行った。そこでは戦国から安土・桃山時代に行われた茶会の記録、「茶会記」のなかでも白眉の存在である、和泉国堺の豪商天王寺屋三代四人が書き留めた『天王寺屋会記』のうち、初代の津田宗達の『宗達他会記』の分析を通じ、幾つかの新知見を得ることができた。具体的に述べると、まず『宗達他会記』の客組をもとに、頂点を茶会の亭主または客とし、客—亭主という関係を辺とするネットワークを形成する。そこでは234個の頂点と、680本の辺(重複度有)が得られた。クラスタリングソフトウェア DPclusにより、頂点の非排他的クラスタリングを行ったところ、パラメーター(CP=0.5、density>0.6)で、28個のクラスタを得た。また density=1(完全多角形)のクラスタは21個が抽出され、その最大は、千宗易(利休)が属する完全七角形であった。こ

れは千利休が堺の茶の湯界にデビュー早々の時期から既に、この世界の重要人物である津田宗達を始めとする天王寺屋一族、及びその周辺の人物達と深い繋がりを持っていたことを意味するものであった。

今回の報告では、『天王寺屋会記』のうち宗達の息子で天王寺屋としては、三代目にあたる津田宗及の他会記の分析を通じ、戦国から安土・桃山時代の、統一政権出現期の畿内の茶の湯の世界を見て行きたい。そこでは前代の細川・三好政権とは異なり、明確に天下統一の意志を持った織田信長・豊臣秀吉の存在は大きく、宗及も千利休などと共に信長・秀吉の茶頭として兩人と深く関わることになる。足利将軍以来の武家政権を目指した、信長の東山御物への執着と、その所有による権威付け。それらと茶の湯の拘わり。非業の死を遂げた信長の後継者たらんとした秀吉の茶の湯の政治利用。いずれにも宗及自身巻き込まれていくことのである。

本稿では、堺の茶人の交友からこのような社会情勢を炙り出していき、それが堺の茶の湯界にどのような影響を与えたかを明

らかにしてみたい。その場合茶会の全体像の把握が先ず必要であり、また個別の交友関係の特徴の追及というものが必要となろう。そこで今回も前回同様、数理的システムを用い、さらに活字ではなく写真版『天王寺屋会記』[1]から、データを入力していった。その際、活字版の読み違えを訂正しながら作業に臨んだことは、これまた前回と同様である。『天王寺屋会記』の研究で、これまでこういう方法は採られたことはなかった。宗及の茶会記にしても特定の茶人の動向を追ってみたり[2]、ある茶会の特性について言及したり([2][3])、茶道具の使用傾向を知るために資料として利用はされてきた[4]。しかしながら、茶会記全体を数理的システムにより分析するということは行われた事がなかったことを付言しておきたい。

## 2. 茶の湯・茶会記

茶の湯とは、茶(抹茶)を飲むことを目的として人々が集う「寄合」のことを指し、茶会とも呼ばれた。近世になると「茶会」という呼称が一般化していき、現代まで続いている。茶会には「自会」と「他会」の二種類があり、茶会の主催者である人物(これを亭主という)が、この亭主が自らの茶会の記録したものを「自会記」といい、茶会に招かれた人物(これを客という)が、その茶会の様子を書き留めた茶会の記録を「他会記」という。亭主側の「自会記」が亭主の心覚えという性格のためか、開催月日、客名、茶会に使用した自らの道具名など比較的簡略なものであるのに対し、客側の記録である「他会記」はその内容は多彩で、茶会開催月日に始まり、亭主名、同席者名、当日使用された道具名、そしてその道具の観察記述、出された料理の献立などが書き留められており、茶会の内容を知ることができる唯一のものとなっている。

このような茶会記は戦国時代の天文年間(1532~1555)に記録され始めたものが現存している。奈良の塗屋松屋が書き留めた他会記『松屋会記』が最も古く天文2年(1533)から書き始められ、慶安3年(1630)まで4代の当主によって書き継がれている。次が『天王寺屋会記』で、天文17年(1548)12月

から書き始められている。(なお『天王寺屋会記』と天王寺屋については次章でふれる)。その後、やや時を措いて、天正14年(1586)に九州博多の豪商神屋宗湛によって書き始められた『宗湛日記』が、慶長18年(1613)まで断続的ではあるが書き留められている。この三つの茶会記を三大茶会記といい、天文から天正期の茶の湯界の様子を知る重要な情報源と評価されている。

現代は多人数を一度に消化する「大寄せ茶会」が茶会の主流となっており、そこに様々な茶の湯にたいする誤解が生じている。戦国から安土桃山時代に行われていたような、1から5名程度の客を呼んで抹茶を味わい、道具を鑑賞するような茶会は現代でも存在するのである。その一例をあげると、茶会当日、待合という小さな和室にまず招かれた客が三々五々集い、全員がそろって「路地」という茶庭を通り、四畳半か六畳敷の小さな茶室の、にじり口という狭い出入り口から入り、飾られている掛け軸をはじめ、釜などの茶道具を各自鑑賞(拝見)し、メインの客、これを正客というが、その正客から順番に座っていく。客全員が座ると、亭主が茶席に出て、正客と挨拶を交わす。これによって茶会が始まり、亭主の炭手前で炭が継ぎ足され、そして懐石というごく少量の食事が出される。そこでは酒も出る。懐石が済むと菓子が出され、客が食べ終わると「中立」という休憩がとられ、客は一旦茶室を退出する。「中立」後、再び席に戻った客に亭主から濃茶・薄茶が振舞われる。濃茶・薄茶では釜以外、使用される道具も異なる。濃茶の方が主なものだからだ。客が薄茶を飲み終わると、仕舞い込まれた道具を客からの申し出によりもう一度出し、客にゆっくり鑑賞してもらう。それが一通り終わって、ここで茶会は終了するのである。そして客はにじり口から退出し、路地を通過して待合へと戻り、ここで散会する。4時間ほどの時間をかけて行われるこのような茶会を現代では、「茶事」と呼んでいる。

戦国から安土・桃山時代に繰り広げられた茶会も概ねこのようなものであったようだ。ただ当時は待合も無ければ、千利休の登場までは、にじり口も無く、縁側から直

接茶室に入っていたし、出される料理も豪華なものが多かったようだ。この料理も利休が簡素化したようである。当時の茶会と現代の茶事が全く同じものとは言えないにしても、ある程度の共通性を見ることはできるのである。

### 3. 『天王寺屋宗及他会記』

戦国から安土・桃山時代にかけて、和泉国堺に天王寺屋という豪商が存在した。屋号が示すように、その出自は大阪の天王寺であった可能性は高い。宗伯・宗達・宗及・宗凡の四代にわたり商売を手広く営み、宗達からは茶の湯の家として堺の茶の湯界に重きをなした。嫡流以外にも道悦、道叱、宗閑、了雲といった一族も存在した。宗及の子で、宗凡の弟は禅僧江月宗玩となり、大徳寺の住持にまでなっており、江戸時代初期の「紫衣事件」の当事者の一人としても有名である。この天王寺屋の宗達・宗及・宗凡、そして宗玩まで書き留めた自筆茶会記を『天王寺屋茶会記』という。天文17年12月に始まる「宗達他会記」は466会、総参加者234人であり、「宗達自会記」は391会、総参加者246人を数えた。

宗達の子である宗及の会記も「自会記」・「他会記」ともに存在している。「天王寺屋津田宗及自会記」は永禄9年(1566)10月に始まり、天正15年(1587)3月まで21年間の分が書き留められ、総会数1084会、延べ参加者は2488名を数える。分析を通して言える事は、一族の道叱・宗閑の参加会数の多さがまず指摘でき、一族の結束の強さが見られた。また千利休・山上宗二などの堺衆のグループ、さらには禅僧グループ、禅以外の宗教勢力などのグループに分けられることができた。そしてそこには織田信長の堺政所代官、松井友閑の存在が浮上してきたのである。一方「天王寺屋津田宗及他会記」(以下「宗及他会記」と略称する)は、永禄八年(1565)9月23日の天王寺屋道叱の朝会に始まり、その最終記述は天正13年(1587)3月5日の豊臣秀吉の会である。

その総会数は742会を数え、延べ参加人数は1148人であった。但し、その他に宗

及一人が招かれた、或いは参加した「独会(どっかい)」が、110会ある。その内訳は豊臣秀吉との9会を始めとして、佐久間信栄(不干斎)8会、松井友閑7会と圧倒的に武家が多い。

いずれにせよ、他の二つの茶会記が、後世の転写本であるのに較べ、天文17年から天正15年までの39年間に亘る自筆の茶会記が残されてきたことに『天王寺屋会記』が他の茶会記とは断然異なる価値を持っていることが理解頂けよう。今回は宗及の子、津田宗凡、江月宗玩の茶会記はあまりに会数が少ないので、分析の対象とはしなかったことをお断りしておきたい。なお天王寺屋初代の津田宗伯の茶会記は残っていないので、茶会記の執筆者の初代は宗達、二代目は宗及となるが、家の当主としての世代は、それぞれ二代・三代となることも付記しておきたい。

「宗及他会記」に多く登場する人物は下記の表1の通りである。山宗二・千宗易の欄では、山上宗二が客として千宗易の茶会に参じた回数が14回、逆に宗易が宗二の茶会に参じた回数が6回、合わせて20回ということを表している。合計8回以上のリストを与えた。

表1. 『宗及他会記』多出現者

山宗二_千宗易	14	6	20
道叱_銭宗訥	11	5	16
銭宗訥_松友閑	8	7	15
道叱_千宗易	12	2	14
山宗二_松友閑	9	5	14
道叱_松隆仙	9	5	14
松隆仙_道叱	5	9	14
道叱_草道設	12	1	13
了雲_道叱	8	5	13
銭宗訥_草道設	8	4	12
松隆仙_千宗易	5	5	10
千宗易_草道設	8	1	9
今宗久_道叱	5	4	9
宗瓦_千宗易	7	1	8
宗閑_塩宗悦	7	1	8
山宗二_佐信栄	7	1	8
道叱_山宗二	7	1	8
山宗二_銭宗訥	6	2	8
宗閑_了雲	6	2	8
銭宗訥_佐信栄	5	3	8

## 4. 分析

### 4.1 分析方法

他会記の場合、客としてある亭主の茶会に参加するという方向性を持った関係がある。それを「客→亭主」という、茶人を頂点、茶会参加を有向辺で表示することによって、ネットワークを構成することができる。一種の、ソーシャル・ネットワークであると言える。これは宗及の父、宗達の他会記でも有効に機能した。

まず、宗及他会記の翻刻を原本で確認し、誤翻刻と思われるところは訂正し、かつ表記は異なると思われるが同一人物と考えられる人名を統一した。その上で、上記の「客→亭主」関係を総合した。その結果として、頂点(茶人) 289、辺 815 のネットワークを得る。

その可視化においては、R の igraph, Cytoscape などを用いる。また、クリークの抽出などについて、DPCLUS も援用した。

### 4.2 交流ネットワーク

#### (1) 基礎データ

ネットワークの頂点(nodes)および、重み付有向辺(weighted & oriented edges)、密度(density)は表 1 のとおりである。辺には、対応する「客→亭主」関係が何回発生したかに応じて、重み(weight)を付与している。その辺の重みを制限したサブネットワークについても記した(辺を持たなくなった頂点は削除する)。

表2 ネットワーク基礎データ

network	頂点	辺	密度
全体	289	815	0.00979
重み>1	80	196	0.03101
重み>2	38	83	0.05903
重み>3	23	50	0.09881
重み>4	18	38	0.12418

重み 1 の辺が、619 件と大変多いことがわかる。重み 1 に応ずる頂点も 209 である。頂点と辺は指数的(あるいは多項式的か)に減少するが、密度は線形に増加している。その様子はつぎの通りである

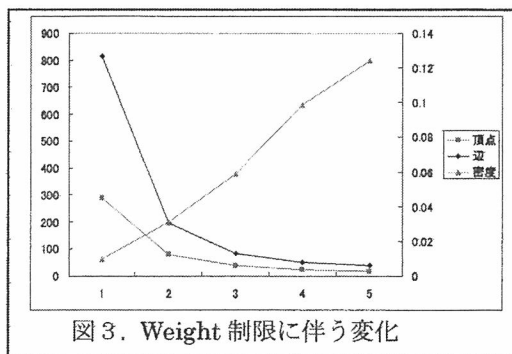


図3. Weight 制限に伴う変化

#### (2) ネットワーク全容

Cytoscape により、network 全体を描画すると次のようになる。ここでは、spring embedded により配置した。単純な接続(重み=1など)が周辺に、密な関係が中央にあつまっている。

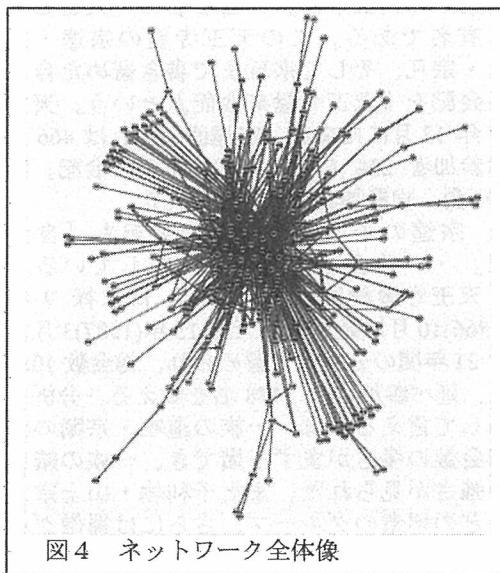


図4 ネットワーク全体像

#### (3) 中央部

特に密集している中央部を拡大すると、つぎのとおりであり、著名な茶人があつまっている。なお、右上に SG とした頂点は宗及を意味するが、宗及が単独(Single)で参加した亭主に対してのみ辺を与えている。

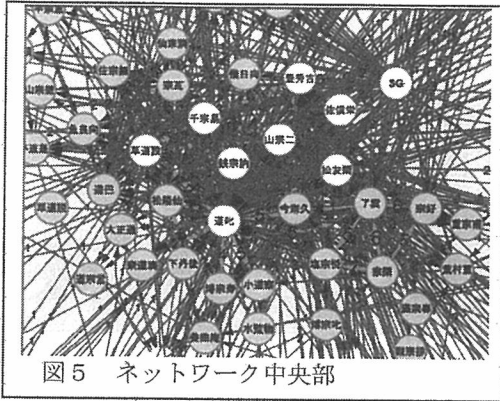


図5 ネットワーク中央部

さらに状況を明確にするため、重み4以上の辺をもつ頂点のみのサブネットワークを求めると、図6となる。千宗易を始めとして、他にも織田・豊臣政権下の堺代官松井友閑などがみられる。

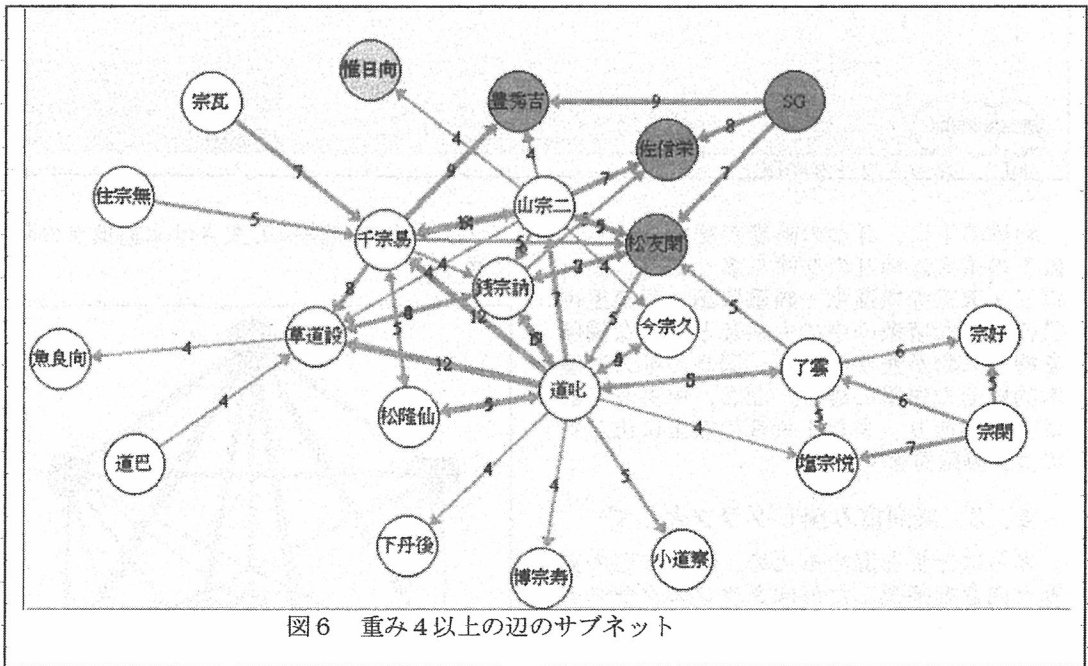


図6 重み4以上の辺のサブネット

図4、5が、対象の人物がたった一度でも他会記に登場していれば取り上げて作成したものであるのに対し、図6はある「客→亭主」関係が4回以上成立している人物対に限定している。宗及と共にある亭主の

茶会に参加する頻度の高い人物とも見ることできる。

利休グループ、天王寺屋グループ、秀吉と側近（信長の代からの堺担当者である、松井友閑、信長に追放された佐久間信栄）などが絡み合っている様子が確認される。800回に近い茶会においても、これらの茶人が主体となっているのであった。

図6に現れる茶人は、表1の茶会参加相互関係において勿論上位を占めている。

図4～6のような『宗及他会記』の全体像は今回初めて公表されるものであり、これまでは部分的な特徴しか指摘されていなかった〔3〕等）。これによって、後に述べるように天王寺屋を巡る交友関係が明確かつ解りやすく可視化され、利休や山上宗二の立場も明確になったといえる。

#### (4) 階層の様相

千利休を頂点として、その接続関係でのヒエラルヒーをみることによって、どの程度の階層が認められるかを確認したい。Rのigraphパッケージにて、Reingold-Tilford法による階層はつぎの通りである。

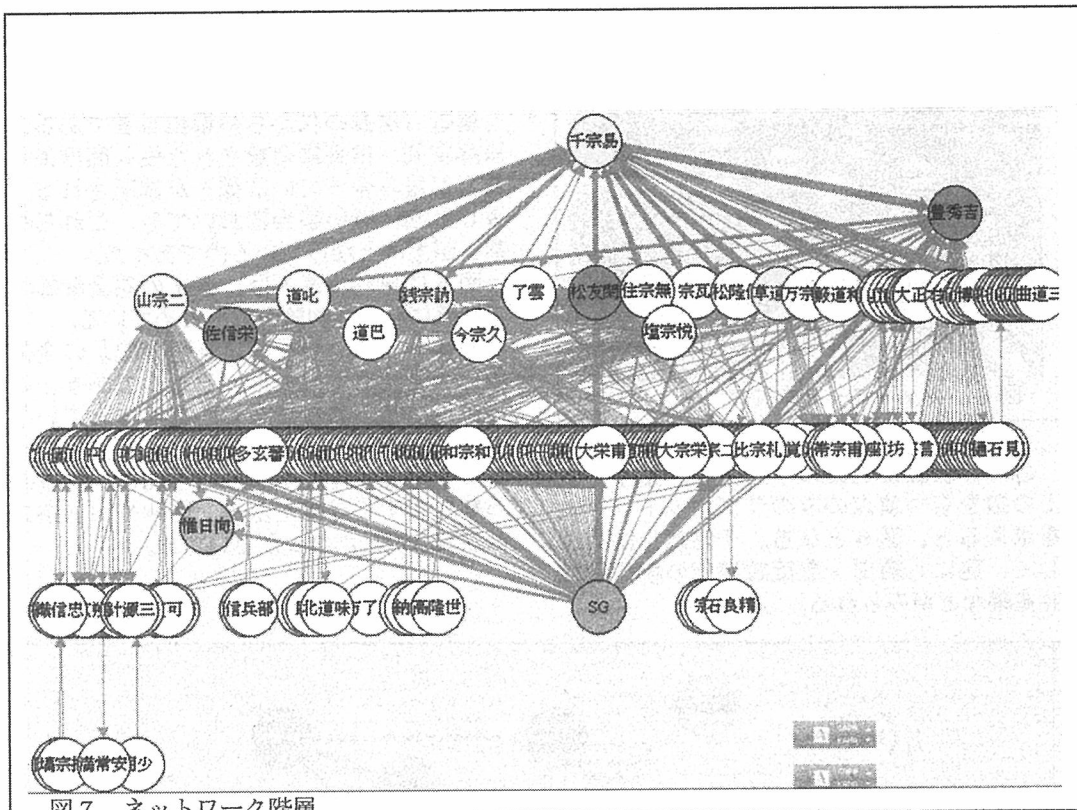


図7 ネットワーク階層

利休の下に、3つの階層が認められる。直下の茶人は相互の交流も多くある。山上宗二・天王寺屋道叱・銭屋宗訥・草部屋道設のような堺衆の中でも宗及と密接な関係を持つ人物が並んでいる。図6の茶人は基本的にその階層に居る。なお、中央最下部はSGであり、また1段目の右上に出したのは、豊臣秀吉である。

#### 4.3 無向重み無しグラフとして

さらに分析を進めるため、各々の辺の重みと向きを無視した無向グラフのクラスタリングを行う。即ち、一度でもよいから、お互い間に「客→亭主」関係が成立している人物の密なまとまりを求める。

これには、宗及の父である宗達の茶会記の分析にも使用したDPCustによって、頂点の重複を許すクラスタリングを行った。

密度を1に指定すれば、完全多角形（すべての対角線を含む多角形）、つまりクリ

クラスタの接続線の太さは共通頂点の数に従う。

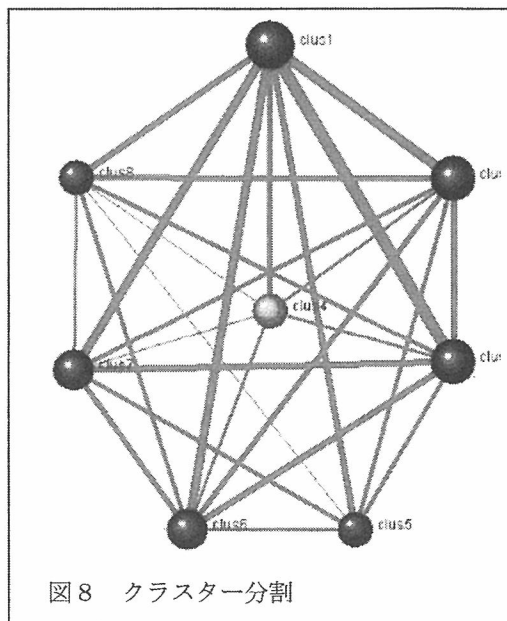


図8 クラスタ分割

この第一クラスは完全七角形であり、千宗易、山上宗二、草部屋道設、松江隆仙、住吉屋宗無、天王寺屋道叱、銭屋宗訥から構成される。堺の主要茶人である。図9に、その完全七角形と、外部からこれに接続の多い、松井友閑を加えて記載した。

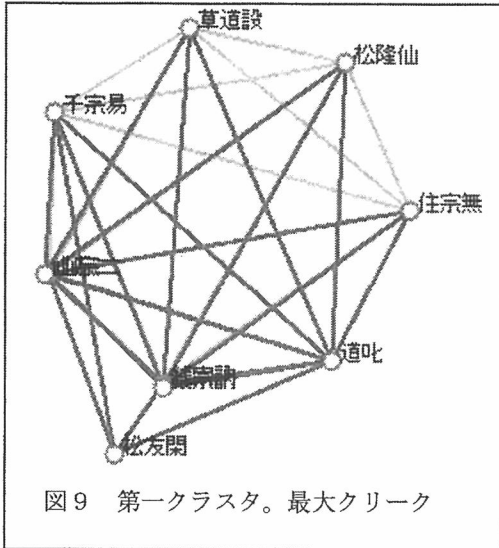


図9 第一クラス。最大クリーク

第二クラスは、完全六角形であり、天王寺屋道叱、同宗閑、同了雲、道巴、尼崎屋宗好、銭屋宗訥、から構成される。まさに、天王寺屋一族そのものである。図10には、そこに接続の多い、山上宗二、松井友閑を加えて記した。

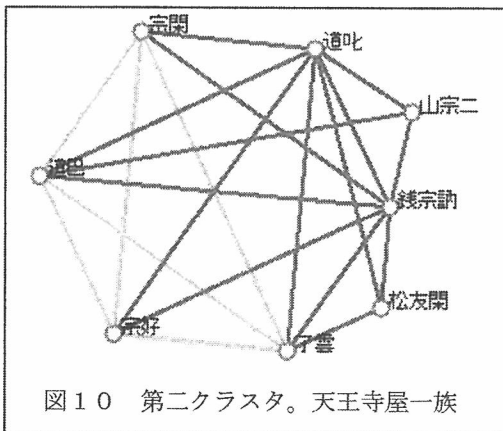


図10 第二クラス。天王寺屋一族

その他のクラスターは省略する。

#### 4.4 茶人の同席（共起）関係

一度の茶会を文章に、その亭主と客を語とみれば、文章分析に対応させることもできる。語の共起に当たるのが、茶会での同席（ここでは亭主と客を区別しない）となる。そのような立場で考察することは、茶会に同行している茶人の集合を特定するのに役立つ、交友関係を広く見渡すことに役立つ。また従来曖昧にとらえられていた、天王寺屋一族についても、明確なまとまりとして与えることができる。前節の DPCLUS による方法もそれを反映しているが、どの程度の同席回数があったかを見るのには適さない。

そこで、生物系統学的な考察を加える。即ち、茶会を "taxon"、茶人を "character" とみなして、茶会での共起情報を 0.1 で表現したデータの系統学上の近接関係をみる。実際には、系統学上のソフトウェアによって描画する。図11（次頁下）では、SplitsTree4 の NeighborNet を用いた。これによって、天王寺屋道叱の亭主、また茶会参加が突出していること、天王寺屋一族のまとまり、利休のグループなどが特定できる。

#### 5. 考察

「宗及他会記」の諸分析から明らかになったことは、天王寺屋一族のまとまりは言うに及ばず、堺衆のなかでも、千利休とその弟子山上宗二との親密な関係が指摘できたことである。このことは「宗達茶会記」でもある程度裏付けられていたが、「宗及茶会記」では重要性とともに、山上宗二とも更に親密度をましていることが見て取れた。特に宗及と利休の関係が、従来の研究では堺での立場の違い、(豪商天王寺屋と新興商人の千)、織田・豊臣政権における互いの茶道という立場から、一方的にライバル関係のみが強調されてきた。その方が分かり易かったからであろう。しかし今回までの一連の分析により、むしろお互いの立場の違いを認め合いながら、茶の湯に親しみ、さらに尊敬したであろう武野紹鴎の遺児、宗瓦を山上宗二も含めた三人が温かく見守る、意外な情景が浮かび上がってきたのである。それはこれまでの数理的分析

により明白な事実となった。また堺において利休のグループの他にも、銭屋、草部屋、松江隆仙なども天王寺屋との親密な関係を持っていたことが明らかになった。これらの事実は、ただ茶会記を漫然と眺めているだけでは明確にはならないことばかりである、と言っても過言ではなからう。

## 6. あとがき

今回の報告を含め、『天王寺屋会記』のうち、「宗達他会記」・「同自会記」、「宗及他会記」・「同自会記」について、その交友関係を中心に数理的システムを用いて、種々分析を行ってきた。今後は、当時の茶会記の眼目である道具を視野に入れ、『天王寺屋会記』のデータベース化の実現を目指して行きたい。そのことの意味は、現在の茶の湯文化研究、特に戦国から安土・桃山時代の研究において、改めて評価がくだされることに寄与することが間違いないからである。

さらに、永禄・天正期の茶の湯界の交流関係という、現実のデータから作成されたネットワークとして、ネットワーク理論においても様々な利用が可能であると思われる。

## 参考文献

- [1] 『影印本天王寺屋会記』永島福太郎編 1989年 淡交社
- [2] 戸田勝久『武野紹鷗研究』1969年 中央公論美術出版。(所収「紹鷗の息子、宗瓦の動向の追及」が典型例)
- [3] 熊倉功夫 山上宗二の生涯と茶の湯.. 『山上宗二記 研究 一』9-34頁、1993.
- [4] 『宋・元の墨蹟と絵画』茶の湯と掛物—I— 茶道資料館編 昭和56年、所収「茶会記にみる掛物一覧」(典型例)

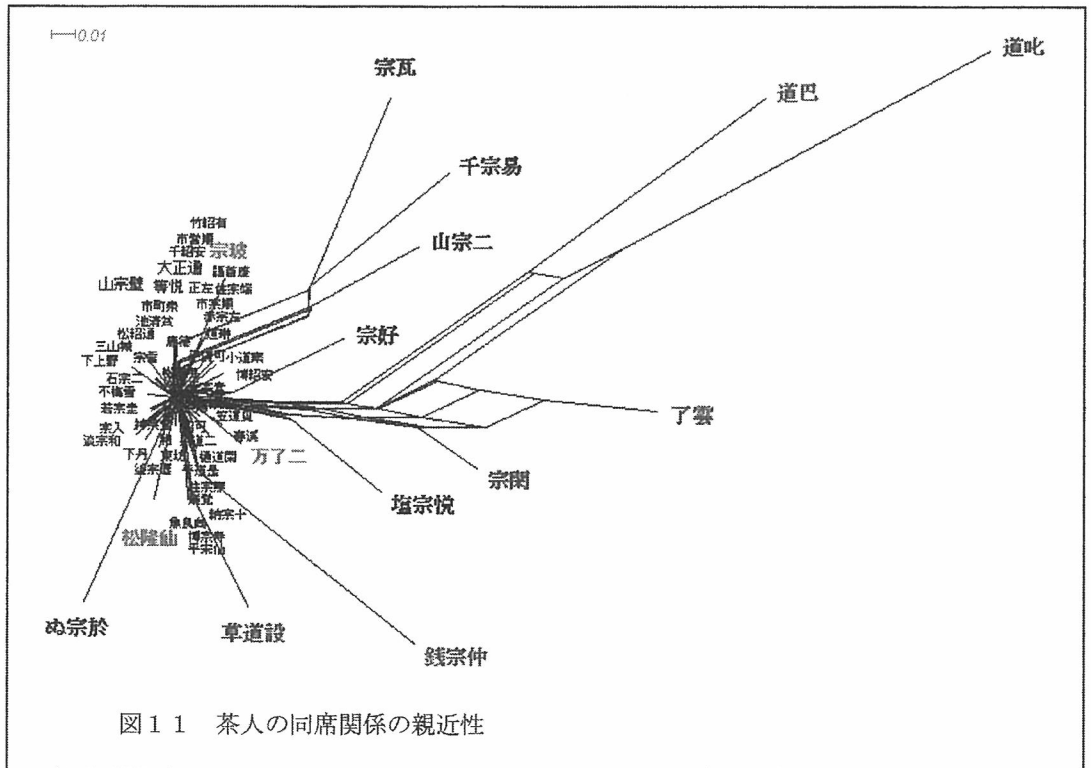


図1-1 茶人の同席関係の親近性